

# 論文審査の結果要旨

論文題名
手根管症候群に対する患者教育法と神経滑走法の患者立脚質問紙および身体機能の短期効果と1年後の手術療法の有無による長期効果比較 非ランダム化比較試験
申請者氏名：久保匡史氏 学籍番号 1991001
審査の所見
＜論文課題概要＞
<p>手根管症候群患者は50歳代と80歳代に好発し、疼痛と運動機能不全を伴う絞扼性神経障害で、日常生活動作に支障を来す。手根管症候群の治療選択は手術療法と保存療法がある。手術療法は手根管症候群重症者に治療成績が良く、しびれや疼痛の軽減がされるが、術後3割において疼痛が出現する。そのため手術へ移行させない保存療法の開発が望まれている。臨床場面においては、併用療法として神経滑走法などの運動療法や患者教育のためのエクササイズを行うことがある。本研究においては手根管症候群患者を対象に、患者教育と神経滑走法の短期・長期効果を比較検証した。</p> <p>手根管症候群患者において、装具療法と患者教育実施群、装具療法と神経滑走法実施群に分け治療効果を検証する非ランダム化比較試験を実施した。全対象者に対し、夜間に1ヵ月間装具を装着させた。次に患者教育群には日常生活での手の使い方や注意点を書面と口頭で説明し、個別に動作を指導した。患者教育の内容は(1)疾患理解、(2)禁忌姿勢、(3)休息指導、(4)身体活動量の確保、(5)保温指導、(6)動作指導を記載したパンフレットを作成し、動作指導を受けた内容について、生活において、実践させた。神経滑走法群には神経滑走運動とTotttenらの方法の基づき、6種の運動を5~10回の反復練習を1日につき、3回実施した。各群ともに4週間、自宅での自主訓練を実施した。</p> <p>短期的効果は、患者立脚型質問紙、感覚検査、筋力を用いて群（患者教育群、神経滑走法群）と時期(実施前と実施後)による共分散分析を用い検証した。長期成績解析方法は群と手術の有無を<math>\chi^2</math>検定にて検証した。</p> <p>その結果、短期的実施前後で患者教育法と神経滑走法は2点識別覚が改善していた。患者教育法と神経滑走法は、長期効果として手術に至る割合について両群間で差がなかったものの、手術を回避できる効果を認めた。</p> <p>＜本研究の新規性と今後の発展性＞</p> <p>患者に対し、手根管症候群患者の症状を悪化させないための保存療法について、日常生活に導入できる患者教育方法と神経滑走法の介入による自主訓練に着目し、非ランダム化による臨床介入研究の結果から、保存療法の短期効果の実証と長期では、症状を悪化させないという点を明らかにした点が、評価に値する。臨床における治療効</p>

果検証を継続し、今後の研究の発展を期待したい。

<口述審査>

本論文審査会は2022年10月25日18時15分よりから約1時間に渡り実施された。

学外審査員として早稲田大学 人間科学学術院 田山淳教授とともに、3名の審査員で審査を行った。

前半30分間のプレゼンテーション後、各審査委員からの質疑応答を行った。

委員からは、手根管症候群患者に対する運動療法について、神経滑走法による改善成績や、先行研究における患者教育の効果への説明、対象患者の重症度の割合やBlandの分類における割合について、長期成績における追跡方法、患者教育と神経滑走法を選択する時期や病態など、短期における感覚機能の改善を認めた理由について、本研究の結果を踏まえた臨床への示唆について指摘がなされ、本論文の改定を求めることとなった。

<審査結果>

論文審査における質疑応答や、改定された論文の内容について総合的に審査を行った結果、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

以上のことから、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

【審査員】

主査：金村尚彦（埼玉県立大学）

副査：今北英高（埼玉県立大学）

副査：田山 淳（早稲田大学）